

平成30年1月20日〜28日、徳島県立21世紀館イベントホールでアートプログラム「藍のけしき」が開催されました。藍染めの布をドーム状に吊るし、内側から光をあてたインスタレーションが公開され、藍と光が描く幻想的な空間に来場者は時間を忘れて見入っていました。制作を担当したのはアメリカ・インディアナ大学美術学部准教授のローランド・リケッツさん。藍染めの作者は、地元徳島はもちろん、イギリス、イタリア、カナダなど世界10カ国から参加した451人です。

※ ※ ※

7月24日は「とくしま藍の日」。東京五輪・パラリンピックの公式エンブレムに藍色が採用されたのを機に、阿波藍を国内外にPRするとともに、伝統文化の継承を図っていくと、徳島県では7月を「とくしま藍推進月間」と決めました。



徳島で染(すくも)作りと藍染めを学んだリケッツさんは日本語も堪能。時々、阿波弁が混じります



直径10mにも及ぶ藍のドーム。人の動きとともに布がゆらぎ、影もゆらぐ

藍は濃淡によつて48もの呼び名があると言いますが世界各国から寄せられた藍の色は48どころか……！
光と時間に洗われ、ひとの暮らしを映した400色を超える藍色の饗宴——。
吉野川に育まれた阿波藍の魅力と可能性を世界から集まった藍色が教えてくれました

7月1日〜31日の間、県庁はLEDでブルーにライトアップされ、県内外でワークショップ、ファッションショーなど多彩なイベントが行われました。

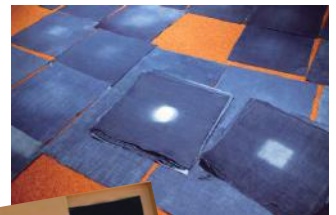
「藍のけしき」もそのひとつです。参加者は阿波藍で麻布を染め、それを中央に穴の開いた専用の箱に入れて約5カ月間保管。空気が光にふれ、暮らしの中で変化した布を集めて、ひとつの作品にするというアートプログラムです。国内外に参加を呼びかけたところ、SNS(ソーシャルネットワークシステム)で世界に広まり、あつという間に定員に。このうち100人以上が「ジャパンブルー」の魅力を知る海外からのエントリーでした。

※ ※ ※

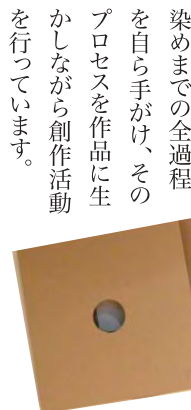
阿波藍に魅せられ、徳島で染作りと藍染めを学んだリケッツさん。アメリカでも藍の栽培から染作り、



参加者に藍染めの指導をするリケッツさん



染めまでの全過程を自ら手がけ、そのプロセスを作品に生かしながら創作活動を行っています。



「光で退色するのは藍の弱点と言われるけれど、僕はそれを特徴として作品の中に取り入れています。今回の作品は、藍色が時間とともに変化していく、その時間を、どう作品の中に取り入れるかが重要」と話していましたが、集まった布に興奮気味。「とてもおもしろい。想像以上、というか、想像できないからおもしろい！」——同じキットを使っているのに一枚一枚違う藍の色。約450枚の布を使って作品が完成しました。作品から立ちのぼる圧倒的な存在感は、阿波藍の力、そして、布にしみ込んだ451人の思い、時間なのでしょう。

7月24日は東京五輪の開幕日。かつて日本中はその名を馳せた阿波藍が、今度は世界を染め上げる——夢ではない気がしませんか？